



対馬丸 通信

発行：(公財)対馬丸記念会

発行人：高良 政勝

編集：対馬丸記念会事務局

Tsushima maru press

平成 27 年 12 月 15 日発行 第 31 号



私は二〇〇九年八月二十二日に悪石島・奄美大島への「祈りの旅」を計画した。しかし、船便の都合で奄美への旅は断念した。奄美は漂流の末、救助された命の島である。一度はぜひ行かねばと思っていた。今年には戦後七十年(対馬丸沈没から七十一年)、マスコミは戦争の記事を連日のように大々的に報じた。奄美の新聞も対馬丸事件と奄美について報道した。それに呼応して地元が動き始め、今年の五月、

多くの避難者や犠牲者が漂着した奄美大島・宇検村の元田信有村長と村職員が来沖、生存者から当時の状況を聞いた。私もお会いしたがその際、奄美への「祈りの旅」についてお話ししたら、「私たち宇検村が窓口となつてご案内します」との温かい返事をいただき、今回の「祈りの旅」が実現した。台風や天気

に響き渡り、少人数ではあったが厳粛で価値の高い慰霊祭となった。漁船によるクルージングは六時間余に及び、私の上陸地点である大和村と宇検村の境界線あたりを二往復して捜したがその岩場は特定できず、おおよその場所を確認した。七十年余の年月が地形を変えていた。翌六日の午前中は漂着後、手厚く介抱された大和村今里を訪問、当時の住民の仲元静好さん(80)や永田義久区長(69)から話を聞いた。特に中元さんたちは大人たちから「生存者の男の子二人が、医療知識のある押川さんの家で治療を受けた。夜通し泣いていた。」と聞いていた。私たち生存者四人はサブ二で二人ずつ救助されたが、最初の二人は正英と私であった。それは「男の子二人」の証言と一致する。夜

奄美大島 「祈りの旅」 報告

公益財団法人対馬丸記念会評議員

生存者 上原 清

「私たち宇検村が窓口となつてご案内します」との温かい返事をいただき、今回の「祈りの旅」が実現した。台風や天気に注意を払いながら、八月四日〜七日に決定。四日の昼過ぎに那覇空港を出発、一時間ほどで奄美に着いた。出迎えに来た宇検村職員、藤さんの公用車で宇検村に向かった。何回かトンネルを通過して宇検村に入り、展望台からの最高峰の湯湾岳など山岳地帯の風景を眺めていると、藤さんの携帯に吉報が入った。今回の目玉の一つであった嶺山旅館の跡地とその女将の姪が分かったとの知らせであった。村役場に着くと、元田村長や職員に出迎えら

れた。南海日日新聞の記者もきており取材を受けた。その晩は村の食事に招待されビールで乾杯、楽しいひと時を過ごした。台風13号が北上していたので、急遽日程を変更、五日に海上慰霊祭をすることにした。焼内湾内の漁港から漁船で出発、湾の出口の真ん中にある無人島の枝手久島を通過した時、私の鳥打帽が強風に飛ばされ海に落ちた。直ぐに船はUターンして網ですくつてくれた。その時、回りの海面はキラキラ光っていた。魂たちが私を呼んでいたのだろうか。魂たちも濡れだ、私も濡れた帽子をかぶろう。湾を出て、

近くの沖で慰霊祭をした。メンバーは松井副村長、藤さん、琉球新報の記者、沖縄タイムスの記者、NHKの取材班3人、元田村長と私の9人。天気がよく、波もおだやかだ。私は七十一年前の遭難のことを思い出していた。竹のイカダに乗り約一週間の飲まず食わずの過酷な漂流。特に喉の渇きに苦しめられた。そのことを思い、千羽鶴、おもちゃ、サーターアンダギーなどの食べ物、湯湾岳から汲んで来た霊水を流して魂たちの喉の渇きを癒し、最後に竹の灯籠を流して慰霊をした。

高良理事長の弔辞を代読したが、朗読は海

で生存者約二十一人は古仁屋に集められた。

高良理事長の弔辞を代読したが、朗読は海

「対馬丸」慰霊碑建立へ

東シナ海臨む船越海岸に

宇検村



宇検村は19日、太平洋戦争中に撃沈された空襲開閉「対馬丸」の慰霊碑建立委員会を同村校場で開いた。初代会長松井富彦副村長を指名し、慰霊碑建立にかかる経緯を村長らからヒアリング、建立予定地である同村学校の船越海水場付近の集落地を視察した。2015年度中の建立を目指し、那覇市の対馬丸記念館や生存者、遺族などに協力を呼び掛ける。

対馬丸は1944年島の北西約10キロ沖で、人が乗船していたが、その多くが海に投げ出され、1485人が犠牲になった。宇検村や大和村には竹のいかたで漂流した生存者約20人が漂着、宇検村には100体近い遺体が流れ着き、住民たちが埋葬した。当時ほかにも被害規模を正確な情報や記録はほとんどない。

宇検村では戦後70年に当たる今年5月、元田信有村長が沖繩の対馬丸記念館や遺族を訪問。8月には生存者が宇検村を訪れ、海上慰霊祭を執り行った。慰霊祭を執り行った。慰霊祭を執り行った。慰霊祭を執り行った。

委員会のメンバーとなった宇検校長の川淵哲二区長(88)は「今年1月に慰霊碑建立の要望書を提出した。一歩前進できて、ありがたい。小中生の平和学習に活用したいという要望もある。悲惨な歴史を語り継ぎ、個人の記憶をきちんと記録として残したい」と話した。

「かん口令」がしかれており、私たちが生存者は「嶺山旅館」に約一カ月軟禁状態にされた。生存者は大和村から宇検村に至る海岸に漂着したが、宇検に漂着した男性二人が山を越えて助けを求めた。その一人は那覇の疎開団の団長だった田名宗徳先生だと思われる。当時、青年団の一人だった大島安德さん(88)が、鐘を鳴らして救助に当たった。おびただしい数の遺体が流れ込んだ焼内湾は地獄と化し、海は腐敗臭が漂い、遺体は正視できないほどだったと言

う。すぐに憲兵がやってきて抜刀し、「絶対に他言無用である」との記憶には無い。嶺山旅館は生存者が帰郷した一九四四年のうちに空襲で全焼して廃業、女将は亡くなった。現在、旅館跡には高田電気株式会社ビルが建っている。旅館の女将の姪、東三枝子さん

南海日日新聞 平成27年8月6日

(86)に会うことができた。彼女は当時本土にいたとのことで、「対馬丸の生存者が宿泊したことは初めて知った」と驚いていた。女将の名前が「嶺山メギリ」さんで、さらに手伝いをしていたのが甥の嶺山健一さんだとも分かった。健一さんは年齢が私と同じくらい少年で、彼と私の二人で荷車を押ししてみんなの配給の食糧を取りにいったことがあった。その彼も亡くなっていた。集落の人々と多くの遺体を埋葬した大島安德さんは、枝手久島にハイビスカスを植える活動を二十年間続けた。このハイビスカスの花は季節ごとに咲き乱れ魂たちを慰めている。この枝手久島沖で初めての慰霊祭を行うことができたことを神に感謝したいと思う。これで、私の「祈りの旅」は成功裏に完結した。そして、長年背負い続けた「対馬丸の重荷」を下すことができたことを犠牲者に報告し、御霊の安らかならんことを願おう。

慰霊の旅の様子と、感想を交えて記したが、これで遺族や生存者の皆様への報告とする。

併せて今回の海上慰霊祭を執り行っていた、宇検村の皆様への大いなる感謝で本稿を締めよう。

対馬丸と奄美大島を結び

平和の架け橋建立へ

対馬丸記念館学芸員 宇根一磨

奄美大島宇検村に「対馬丸」の二十一名の生存者が漂着しました。地元の住民たちの手によって、慰霊碑が建立される！

今から七十一年前、奄美大島の大和村、宇検村、瀬戸内町(当時実久村)の海岸一帯には対馬丸で犠牲となった方々の遺体や

戦後七十年を機に、今年の五

「対馬丸」慰霊碑建立へ

東シナ海臨む船越海岸に

宇検村



宇検村は19日、太平洋戦争中に撃沈された空襲開閉「対馬丸」の慰霊碑建立委員会を同村校場で開いた。初代会長松井富彦副村長を指名し、慰霊碑建立にかかる経緯を村長らからヒアリング、建立予定地である同村学校の船越海水場付近の集落地を視察した。2015年度中の建立を目指し、那覇市の対馬丸記念館や生存者、遺族などに協力を呼び掛ける。

対馬丸は1944年島の北西約10キロ沖で、人が乗船していたが、その多くが海に投げ出され、1485人が犠牲になった。宇検村や大和村には竹のいかたで漂流した生存者約20人が漂着、宇検村には100体近い遺体が流れ着き、住民たちが埋葬した。当時ほかにも被害規模を正確な情報や記録はほとんどない。

宇検村では戦後70年に当たる今年5月、元田信有村長が沖繩の対馬丸記念館や遺族を訪問。8月には生存者が宇検村を訪れ、海上慰霊祭を執り行った。慰霊祭を執り行った。慰霊祭を執り行った。

委員会のメンバーとなった宇検校長の川淵哲二区長(88)は「今年1月に慰霊碑建立の要望書を提出した。一歩前進できて、ありがたい。小中生の平和学習に活用したいという要望もある。悲惨な歴史を語り継ぎ、個人の記憶をきちんと記録として残したい」と話した。

月、奄美大島宇検村から元田村長が初めて対馬丸記念館を訪れ、当時奄美大島に漂着した対馬丸生存者の平良啓子さんや上原清さん、當眞秀夫さん達から聞き取りを行い、交流を計りました。その中で元田村長から「村誌編集と同時に対馬丸慰霊碑を将来的に建立していきたい」と前向きな言葉をかけていただきました。

元田村長の来館が対馬丸記念館と宇検村のつながりを深くし、慰霊碑建立へと大きくうごきだしました。

元田村長来館から数カ月後、対馬丸慰霊碑の建立計画が進んでいくことを新聞報道で知りました。この機会に奄美大島で、対馬丸関係の調査ができたら良いなと思っていました。

この思いが導いてくれたのか、沖縄県博物館協会主催の秋の研修会が十一月二十六、二十七日に奄美大島で開催されるといふことで、これを機に私は奄美大島へ行ってきました。そして今回のこの旅に、当時宇検村の無人島「枝手久島」に漂着し救助された対馬丸生存者で語り部の、平良啓子さんと、啓子さんの娘で南風原文化センター学芸員の平良次子さんに一緒に同行していただきました。二十六日は奄美市博物館で開

催された研修会に参加し、研修会後の懇親会の席上で、平良啓子さんに対馬丸事件について語っていただきました。

翌二十七日は研修会を離れ、宇検村へと向かいました。

宇検村へ到着した私たちは、はじめに宇検村役場を訪問し、松井副村長と五月にもお世話になった総務企画課の藤さんから慰霊碑建立についての報告を受けました。報告によると去る十月十九日に松井副村長と村議会議長、宇検

区長の委員三人で構成する建立委員会が立ち上げられ、次年度に慰霊碑建立を予定しているとのことでした。その後、私たちは松井副村長と藤さんに案内されて建立現場へ向かいました。建立現場は高い丘になっており、対馬丸の生存者や犠牲となった方々の遺体が多く漂着したフノシ浜が見下ろ

せ、対馬丸が沈没した悪石島沖の方角がある東シナ海が見渡せるとも素晴らしい場所が予定されておりました。

そして、今回の旅でもう一つ大きな出来事がありました。当時宇検村の青年団員として対馬丸犠牲者の遺体収容や生存者の救助活動にあたった大島安徳さん(88)とお会いすることができたことです。

(詳細については掲載の奄美新聞の記事を御覧ください。)

大島さんは、今でも当時自分が救助した當眞秀夫さんと年賀状のやりとりを行うなど交流を続け、この地に漂着してきた対馬丸の方々のことを絶対に忘れてはならないということで、語り部としてこれまで数多くの場で自身の体験を伝え続けてきたそうです。大島さんが対馬丸への思いを話したためた俳句があるので最後に御紹介したいと思います。

「老ゆるとはかくも尊きものなるや 島の歴史の語り部となりて」

今回、一泊二日という短い日程で、少し物足りなさも感じましたが、宇検村に足を運ぶことができ、大島さんにもお会いすることができ、何より平良啓子さんと次子さんと一緒に行くことができ、とても中身が濃い時間を過ごすことができました。この旅で触れた宇検村の慰霊碑建立に対する思い、大島さんの対馬丸への思いを私たちはしっかりと受けとり、これから記憶、記録に残して伝えていかなければならないと感じました。

私たちを温かく迎えてくださった元田村長、松井副村長をはじめとする宇検村役場の皆様、大島安

徳さん、またこの旅に同行していただいた平良啓子さん、平良次子さんに心より感謝申し上げます。これからも宇検村とのつながりをよりいっそう深くし、慰霊碑が対馬丸と奄美大島の架け橋となればと思います。



東シナ海が見渡せる慰霊碑建立予定地 (上) 予定地に隣接するフノシ浜 (右) / 遺体埋葬現場

「対馬丸」生存者、宇検村訪問

救助者の一人と当時を語り合う

1944（昭和19）年8月に米軍潜水艦の魚雷攻撃で沈没した学童疎開船「対馬丸」の生存者の一人、平良啓子さん（81）＝沖縄県大宜味村＝が27日、宇検村を訪れた。宇検集落や枝手久島に漂着した生存者を救助した大島安徳さん（88）と面会し、当時の様子を語り合った。2人は来年度、船越海岸に対馬丸慰霊碑が建立されることを喜び、再会を約束した。

来年度に慰霊碑建立予定

平良さんの奄美訪問は4回目。1995年の訪問では平良さんの救助に当たった久志診療所の医師・碓元章世さん（故人）など面会。碓元さんのいここにあたる大島さんと会うのは今回が初めて。

平良さんは事件当時9歳。きょうだいと共に対馬丸に乗り込んだ。船が沈没し、竹のいかだで6日間海をさまよい、枝手久島に漂着。診療所で介抱され

（石から）対馬丸生存者の救助活動を行った大島さんと生存者の平良さん。当時の出来事を語り合った27日、宇検村宇検



「地元の人が激励で、性になった女の子を浜きひなやゆで卵を差込で火葬して遺灰を母に入れてくれたり、援助された翌日には父の友人に引き取られて半年間、瀬戸内町古戸屋に滞在。その後、沖縄へ帰郷したという。大島さんとの面会で、平良さんは救助に当たった人々の名前を挙げ、あらためて感謝の言葉を口にした。「手厚く看護してくれた情け深い宇検村の人々の思いを忘れてはいけません。子や孫にも伝えてほしい」と訴えた。

大島さんも「奄美で対馬丸事件を知る人は私一人だけになってしまった。平和教育には語り部が必要。長生きしないといけない」と答え、「老ゆるとはかくも尊きものなるや

に持たせたり、診療所ではとてもお世話になった」（平良さん）。救助された翌日には父の友人に引き取られて半年間、瀬戸内町古戸屋に滞在。その後、沖縄へ帰郷したという。

平良さんは「奄美は幼いころの思い出がたくさんある。慰霊碑を建てようという気持ちに感謝している。心よりどこころになる」と語り、大島さんも「平良さんの著書『海鳴りのレクイエム』は何度も読んだ。直接お話をきいて、頭の奥底にあつた当時の記憶がよみがえった」と喜んで

島（歴史の語り部となりて」と、現在の心境を詠んだ短歌も披露した。大島さんとの面会後、平良さんは慰霊碑建立予定地の見学や役場で村史編集の聞き取り協力、お世話になった人々の墓参りもした。

対馬丸生存者が宇検村訪問

救助者の大島さんと面会



慰霊碑建設予定地訪問も

対馬丸沈没から75年、宇検集落で、本誌記者が対馬丸生存者の平良啓子さんと大島安徳さん（故人）の面会を取材した。対馬丸の沈没は、1944年8月27日、米軍潜水艦の魚雷攻撃で沈没した。生存者は、枝手久島に漂着し、宇検集落の住民らによって救助された。大島さんは、当時9歳の平良さんを救助した。大島さんは、平良さんの著書『海鳴りのレクイエム』を何度も読んで、彼女の体験を聞き取りたいと、宇検集落を訪れた。平良さんは、大島さんに感謝の言葉を述べ、心に残っている。大島さんは、平良さんの話を聞いて、涙を流した。大島さんは、平良さんの話を聞いて、涙を流した。大島さんは、平良さんの話を聞いて、涙を流した。

生存者の平良啓子さん 奄美大島を訪問

宇根一磨学芸員の奄美訪問に、語り部で生存者の平良啓子さんが同行し、宇検村史編集委員に自らの経験を語りました。

その後、当時対馬丸犠牲者の遺体の収容と埋葬にあたった、大島安徳さんと面談し、宇根学芸員とともに当時の証言の聞き取りにあたりました。



慰霊碑建立場所に隣接する「フノシ海岸」に立つ啓子さん（左上）
村史編集委員の聞き取りに答える（上）
救助時に上陸した「枝手久島」（左）

※新聞記事はレイアウトの都合上、再組版しました

琉球新報特別賞を受けた対馬丸記念会の高良政勝理事長（前列左から5人目）、青春を語る会の中山きく代表（同6人目）ら受賞者たち＝13日午後、那覇市天久の琉球新報社



青春を語る会 対馬丸記念館 琉球新報特別賞懇談会

沖縄戦継承 功績たたえ

青春を語る会館 新報特別賞を贈呈

沖縄戦体験を語り継ぎ平和発信に尽くしてきた「青春を語る会」（中山きく代表）と対馬丸記念館（運営・対馬丸記念会＝高良政勝理事長）への琉球新報特別賞贈呈式が13日、那覇市天久の琉球新報社で行われた。（30面に関連）

贈呈式には青春を語る会の中山代表ら元女子学徒10人と、対馬丸記念会の高良理事長や渡口真常副理事長らが出席。富田詢一琉球新報社長から賞状と記念品が贈られた。

富田社長は「戦争体験の風化が懸念される中、後世に戦争の実相を伝え大きな役割を果たしてきた。健康に留意し、平和な沖縄をつくるため貴重な体験を語り継いでほしい」とたたえた。

中山代表は「戦争体験を語ることは容易でないが、体験者の使命と思いやってきた」とこれまでを振り返り、高良理事長は「賞に恥じない活動を今後もしていきたいと誓った」。



琉球新報特別賞 受賞

平成二十七年八月十三日

琉球新報社（富田詢一社長）より、戦後70周年にあたり、対馬丸記念館が青春を語る会（中山きく代表）とともに「琉球新報特別賞」を受賞しました。開館以来平和発信に努めてきたことが評価されました。賞に恥じない活動を今後もしてまいります。

琉球新報 平成 27 年 8 月 14 日



来賓弔辞を述べる、城間幹子那覇市長、宮城篤正遺族連合会長



犠牲者へ献歌を捧げた、「つしま丸児童合唱団」と、「海のトランペット」を歌う沖縄合唱団

戦後70年、対馬丸事件から71年の今年も、対馬丸慰霊祭が執り行われました。昨年の70回忌で一段落をつけ、参列者の減少が心配されましたが、ご遺族の皆様はご高齢にもかかわらず、早くから訪れ、慰霊と平和への思いを一つに、犠牲者の御霊に手を合わせました。

6年前（記念館開館五周年）に悪石島へ「慰霊の旅」に出かけた、生存者の上原清さんが、今年も奄美に出かけ慰霊祭を行った旨の報告がありました。

「今年で戦後七十年という大きな節目を迎えるなか、今なお世界各地では紛争が絶えず、子どもたちを含む多くの人々が犠牲となる悲惨な状況が起きている。私たちは、子どもたちの無邪気な笑顔を一瞬で奪い去った対馬丸の悲劇を心に深く刻み、戦争の愚かさ悲慘さを風化させることなく後世に語り継いでいかなければなりません。そして今を生きる私たちの使命として、未来永劫、二度と同じ過ちを繰り返さないという強い信念を持ち続けていくことをこの小桜の塔の前に改めて誓うのであります。」

と、平和への思いを決意をこめて述べられました。

平成二十七年度 対馬丸慰霊祭

平成二十七年 八月二十二日

那覇市 小桜の塔

来館・視察

□ 5月23日

山口俊一内閣府特命担当大臣(沖縄及び北方対策・科学技術政策・宇宙政策) 記念館を視察。



□ 11月17日

吉村美栄子山形県知事

イベント

□ 5月30日

つしま児童合唱団結団式

平成27年度のつしま児童合唱団の結団式が行われ、今年も男子1人、女子5人が新しく入団し、総勢21人で気持ちも新たに活動を始めました。

□ 6月20日

第27回チャーがんじゅー講座「講談で語る対馬丸」

平和の大切さ」

大阪で活動する、講師の旭堂南照さんによる対馬丸を語る講談会が開かれました。旭堂さんは、五十数年前に大阪で小学校教師として出会った恩師の高良ミチ子先生(高良政勝理事長夫人)との再会から、対馬丸事件を知り、自らのライフワークとすべく、対馬丸を講談で語り始めました。会場には当時の同級生も大阪から駆けつけるなど、熱気に包まれました。

- 5月8日 内閣府沖繩振興局参事官(特定事業担当) 付山本昌男参事官補佐
- 5月27日 内閣府沖繩振興局参事官(特定事業担当) 付中野祐介主査
- 6月23日 松野頼久維新の党党首
- 7月15日 佐藤裁也内閣府参事官
- 11月10日 中島護内閣府沖繩振興局参事官(特定事業担当)、内閣府沖繩振興局参事官(特定事業担当) 付小泉雅洋主査
- 11月11日 横井五六愛知県議会議長



□ 8月1日

いしがき少年少女合唱団

「第3回平和コンサート」

6年ぶりにいしがき少年少女合唱団(砂川富貴子団長)が来館し、歌声を披露、子供達の平和の想いが館内に響き渡りました。



□ 8月22日、9月30日

第24回特別展収集資料が語る「対馬丸」と「遺族たち」 Part 2

対馬丸船体発見から、対馬丸記念館開館までを新聞資料からたどる

昨年に引き続き、遺族会時代から事務局や遺族が独自にスクラップしてきた新聞記事等を拡大展示し、慰霊祭に合わせて来館した遺族の皆様に見て頂きました。特別展を通して、昨年の開館十周年から始めた、新聞報道資料の保管やデジタル化が一

歩前進しました。

トピックス

□ 7月7日

平成27年度第3回那覇市立小・中学校校長連絡協議会

□ 8月4日

平成27年度那覇市立小・中学校教頭研修会

□ 8月6日

平成27年度第3回那覇市立小・中学校平和教育担当教員研修会

□ 7月28日

那覇市立松島中学校教員研修会

昨年度より取組んでいる教育現場との連携事業が順調に進み、那覇市教育委員会のご理解とご協力で三つの研修会を記念館の企画展示室で開催することができました。また、松島中学校のように学校単独の研修もあり、今後も平和学習推進連携事業に積極的に取組んでいきます。

ご寄附

山加恵津子様(4月8日)

垣内富貴様(6月22日)

真志取兼政様(7月31日)

沖繩タイムス販売店会(対馬丸アニメ上映会寄付)(10月20日)

以上、大口の寄付者

□平成27年4月8日

27年10月23日

館内募金箱、屋比久嘉光、平良啓子、李英子、国吉昭英、又吉康

男、羽太勝子、宮下八重子、テレビ朝日映像、金城節子、松永和子、高橋ミエ子、池山潤子、ぶどうの木保育園、前崎嘉光、渡慶次正一、糸数裕子、作田守博子、比嘉いずみ、嘉数昇明、渡喜喜元嗣、石川美智子、又吉キク、社会福祉法人イエス団、古座谷敬、青木忠、遠田博美、喜瀬乗惟、中島輝正、中山和子、ソロプチミスト中村他、沖繩県女性の翼の会、那覇高校有志の会、山口郷子、泊先寛顕彰会、花岡篤司、玉那覇文隆、東恩納春子、甲斐真由美、開南小学校、宮良道子、土肥義胤、東盛キヨ子、菅原佳代子、宮平美枝子、金城直子、琉球新報(琉球新報特別賞副賞)、総義歯研究会、真栄城嘉訓、泉設計(當間卓)、饒平名秀昌、比嘉恵子、島谷敦子、島袋誉之、太田恭子、島袋哲英、東風平朝正、中園博文、西南学院バプテスタ教会、翁長和子、長田正明、高良政勝、外間邦子、渡口眞常、慰霊祭香典、坂本裕子、篠田こずえ、大山齒科、英霊にこたえる会沖繩県本部、那覇市観光協会、宮里依子、名城悦子、道弘良子、名城ミツ子、神田栄三、全国郵便局長会、光文堂コミュニケーションズ(株)、中山きく様、以上の方々からご寄付を頂戴しました、お礼申し上げます。